

作庭実習「森をつくる」11

環境共生園 2010

橋本 侑佳¹⁾・岩村 伸一¹⁾

Seminar in Garden Design “Creating a Forest” 11
Kyôsei-en 2010

Yuka HASHIMOTO and Shinichi IWAMURA

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、作庭を通して森をつくるということをテーマにしている。参加者は、体を使って空間を変えることを体験する。2010 年度も附属環境教育実践センター環境共生園の造成に取り組んだ。ここでは、2010 年度後期に実施した授業での前半の作業の実際を、作業者の目を通して報告する。また、この年この森に設置された「門」についても、その経緯を含め報告している。

キーワード：環境共生園，庭，森，時間，戦争遺跡

雨がしとしと降る夜、寮までの道の外灯で少しだけ薄暗く照らされた環境共生園は、明るい時とはまた違った魅力を持っていると思う。町の中に、こんな空間があること、こんな空間を作れるということはそう数多くあることではない。

私にとってこの空間は、春になれば緑の美しさにほっとし、夏になればその緑の成長に驚き、時にはその伸び放題の草の群れに恐怖を感じ、自然の勢いに圧倒される。秋から冬にかけては作庭実習でこの空間の変化を感じつつ、季節を楽しむ、そんなところである。

学部3 回生で作庭実習の授業を履修して以来、3 回目の参加となる。

当然のことながら、私が初めて参加した2 年前、そして1 年前のことも、今のここは違っている。これまでの参加者が積み上げて来た作業と、その上で自分たちが行う作業、これから先行われる作業、そして、私たちの力以上の自然の力が合わさって、この空間は、どんどん変化し続けている。

1) 京都教育大学



「あそこで何をしていますのですか」通りがかりに作業を見た寮の後輩からよく聞かれる。「森をつくっているんだよ」と答えてみる。「大変そうですね。頑張ってください」多くがこのような反応を示す。「大変だ」と思ったこともなく、「頑張ろう」という気持ちを持って作業するのも違う。草を抜く、土を運ぶ、穴を掘る、木を植える、木を切る、石を据える・・・作庭実習で行われるこれらの作業は、外から見ると大変なのかも知れないが、何か別の感覚を私に残してくれる。作業から生まれる自分自身への発見、空間への発見、驚き、喜び、達成感、疲労感、におい、知恵・・・ここから得るものは多くあり、何より楽しい。また、普段しないような動きが体に馴染んでいく感覚や寒い風が吹く中その寒さを感じて作業する心地よさ、人の手が加わることで変化する空間を感じる・・・そんなことも参加した者にしかわからない感覚としてあり、それが忘れられない。

ただ、道を通る人が、ここに少しでも注意を向けてくれることも、この空間を成立させる重要な要素かも知れない。おそらく、この季節以外は、注意を向けられることはほとんどないだろう。季節ごとの木々の変化にだって、草が伸びたって、誰も何も思わないかもしれない。だけれども、この季節、ここで作業しているからこそ、気付いてくれる人がいるということを知った。草を抜いて、空間全景が明らかになった日、「ここ、こんなやったんや、すごいなあ」高校生が下校時に友達と話しながら帰っていく。今時の高校生たちが、私たちの作業をする姿を見てこの空間に気付いてくれていることが、なぜか嬉しかった。こんな風に、誰かの意識の中にふとした拍子に入っていくような、そんな空間になったらと思っている。

今年の作業で、この空間はどんな姿を見せるようになるのだろう。どんな作業をするのだろう。わくわくしている。

毎回の作業について自分の感覚で振り返ってみたい。

○11月18日（木）

参加者：矢本出希・赤田香苗・浪江知世・吉田賢司・森美由紀・中村友紀・橋本侑佳・
岩村伸一

11月半ばにも拘らず、軽く汗ばむ日差しがあったこの日、作庭実習の現場は大学から環境共生園に移動した。

他の参加者が到着するまで、私はこれから冬にかけて作業する場を附属高校へと続く道から眺めてみた。

今、鬱蒼とした草に包まれている場所がある。中央に草がかたまっているとかかなりの存在感がある。今年は、この作業の何日か前から、ほとんどの部分が「培土園」によって草が刈り取られ、今残っているのは、池の部分と南西側一帯である。季節毎にどんどん風景が変化し、春から夏、この季節まで、草は伸び放題。「どうしよう」草を抜く前は、どこから手を出して良いのか、いつも躊躇してしまう。今回もまた、不安とも期待とも違う何か言葉にならない、体の中でざわざわする感覚を持って立ち尽くしてしまった。

しばらくして、農園側にある門から入って来たみんなと合流して、さっき見ていた空間に入った。「川の上流」と設定されているこの場所は、もう随分「森」のような感覚を与えてくる。附属高校の道路から眺めた風景とはまたひと味違う。空間の中に入って場を眺めてみると、不思議なくらい「特別な場」のように感じている自分に気付いた。





この場がどういうかたちを持っているのか、これからどのように進めていくのか、ここではまず、自分の体を動かすことから始まる。

この空間に手をいれていくための準備として、また、私たちの体をここに慣らす準備としても、「自分の手で草を抜く」作業が始まった。最初の不安をよそに、初めの一歩が出せると、夢中になって手を出すことができた。

午前中雨が降ったこともあり、なかなか抜きやすい。体がかがめて、草むらに潜るような格好で、なるべく根元から引き抜いていく。根についた土はその場でしっかり払い落とす。どんどん前に、横に、自分が進みたい方向に、草を引き続ける。皆、それぞれのリズム、ペースで草を抜く作業を試みる。深く根を張っているものや抜けにくいものも、少しずつ力を加えて「自分の手で抜く」という感覚を味わった。

途中、休憩を挟みながらも皆夢中に黙々と草を抜いていた。時々、「バッタだ」等という声が入る。ここで、心地よく過ごしていた虫たちにとって、私たちが入ることは大事件かも知れない。

今日の作業で全ては無理だったけれど、かなり進んだように見える。草がなくなってくると、一気に空間が変わる。一人一人少しずつ離れて作業をしていたが、抜いた草を集めて積み上げ

てみると、意外と大きい山になることに驚いた。

○11月25日（木）

参加者：赤田・田中雄太・吉田・森・中村・橋本・大岸・岩村

今日の作業は、前回残った池の部分の草を全て抜くこと。珍しく、とても具体的なノルマのような目標が設定された。道具等も使いながら、細かいところまでしっかりと抜いていく。池の部分に落ちた草等もさらえて集めて掃除をした。少し手を加えるだけで、とても美しく見えるのが不思議だ。

同時に、道路際の石をまとめている周辺に伸びた草を両手ばさみで刈った。

南側に残っていた赤松周辺の草は、刈り払い機で刈られた。やはり、機械のスピードは速い。背丈ほどにも伸びた草がどんどん倒れていった。刈られた草を運びながら、木の周辺等の機械では届かないところは手作業で抜いていった。昨年、真砂土を入れたところなので根の張ったよもぎも、心地よい感覚で抜けていく。池の部分とは草が抜けていく感覚が全く違っていった。木に絡み付いているつるも丁寧に切り取っていく。

注意していたつもりなのに、いつの間にか作業着全体にヌスビトハギがくっついていった。苦笑いのような表情が広がる。本当に、これはとるのに一苦労なのだ。

「先生汚いー」お茶を買い足しにいく途中、教育実習の時に私が担当した高校生に後ろから言われた一言。私の着ていたトレーナーにヌスビトハギが大量に付着していた。年を経るに従って、こんなに汚くなれる機会はないのだな、と思う。汚れない空間、遊び、社会はどんどんその方向に向かおうとしている。ただ、こういう「汚い」と思われるような作業から生まれる美しい風景や感情、感覚、経験は大切にしたいと思う。ここに向き合うことで考えること、体が経験したことは自然と残っていくものなのだろう。

トレーナーにくっついたヌスビトハギは、鱗形をしている。厄介な相手ではあるが、その中の緑色の種の色がとても美しかったりする。そんなことを考えながら、一服のひとときを過ごした。

草刈り作業がほとんど終わり、この場所の全景があらわになった。草に埋もれて見えていなかった赤松の成長に驚く。初めて、ここの全景を見て、みんなは何を思うだろう、ここがかつて空き地で、土を入れ、木を植え、今の姿をしているということ。人工的に作られた自然なのに、あたかも初めからこのようだったかのようにここに存在している。

これが今回の作業のスタート地点となるのだ。



○ 12 月 2 日（木）

参加者：田中・吉田・森・橋本・岩村

天気は快晴。

12 月に入ったとは思えない暑さの中、作業が始まった。何日か前から運び込まれていた土。寒い日にはもってこいの土運びだが、この暑さではとても大変だ。気候によっても、作業に対する感じ方が違ってくる。

まずは、南側に伸びているアオギリを切る作業から始まった。東南アジア等では年輪のない木でバルサ材として知られている。毎年切っているはずなのに、直径は 7－8cm ほど。高さは自分の背丈の 2 倍以上はある。とても簡単に切れるのだが、1 人で支えることが難しいので、2 人ペアで作業をした。運びやすいように、枝を落したり、短く切断する作業も同時に行われた。

次は、南西側の地形作っていくために、いよいよ土を運ぶ作業に移る。

スコップはてこの原理を使うと、体に負担をかけずに作業ができる。岩村先生のスコップから土の塊が飛んだ。すくったそのままの形状を維持し、一輪車に弧を描いて一直線に入った。さすがはプロの技、初めてではこう簡単にはいかない。

一輪車は手だけで操作しようとせず体全体で押すように進めるのがコツだ。みんな自分のできる量で少しずつ、土を運び出しながら作業を進めた。

今日の作業で随分とここの様子が変わったように見える。

○12月9日（木）

参加者：浪江・田中・吉田・中村・橋本・古川三盛・岩村

前回の作業とは一転、冬の気候になった。こんな寒い日は土運びが一番。

石の運び方のレクチャーがあった。一人では重くて持てないような石も、ロープ1本、担ぎ棒1本があれば2人でかなり大きな石を運ぶことができるのだ。何度見てもなるほどと思う。

石の重さでロープが押さえられ、2人に石の重さを分担して運ぶ。2人が持つ棒の位置によって、重さの負担が違ってくる。言葉ではあまりピンとこないが、実際に持ってみると実感することができる。「これを持って、体重計に乗ればすぐわかるよ。授業でやってみればいいよ。」と古川さんが、理科の授業の展開まで作ってくれた。



女性陣は南西側一帯への土運び。

男性陣は、第十六師団の石柱建てと、木を切る作業に分かれた。

女性3人で一輪車2台はかなり大変だったが、意外とテンポよく進み体も温まって来た。スコップで一輪車に土をいれる時、支点となる手の延長に一輪車を置いて掬ったそのままの流れで作業すると無駄な動きがなく、効率よく土を移動させることができると古川さんに教えていただいた。去年も同じことを教えていただいた気がする・・・違和感を感じつつも何も考えずに作業していた自分が情けなくなった。体と道具をうまく使って、できる限り体に負担をかけずに作業することはこの場所では大切だ。

途中雨がさらさらと降り出したり、一転青空が広がったりと、気まぐれな空のもと、最後まで作業を継続することができた。

今こうやって自分で体を動かして感じる感覚は体のどこかにずっと記憶されているような気がする。

特別なことをしているわけではないのかもしれないけれど、今私たちが関わっているこの空間は、参加者にとっての特別な場所になると思う。それぞれ違う想いを持ってここを見つめていても、この空間に対する何らかの働きかけを行っていて、それがこの空間という姿としてずっと繋がっていく。そんなことを考えながら今日の作業の場を振り返った。

年内の作業はあと 1 回。木を切り、土を一山分入れた。

今日の作業では、前回の作業に引き続き、南側の地面をなだらかにするために土がいれられた。南側の壁と段々畑から続く土地がなんだか切り離されているように感じていたが、今日の作業で少し繋がってきたという感じがした。これからもっと土を入れて、地形を作っていくようだ。

共生園を眺めながら「これで年は越せる」と岩村先生が言った。



○ 12 月 16 日 (木)

参加者：浪江・田中・吉田・森・中村・橋本・岩村

一気に冬の空。とても寒い中、作業が始まった。今日の作業は南西側への土運びと昨年から取り掛かっている西側の土留めの石垣作りだ。

まずは、土運びで体を温めた。体を動かしていないと寒いので、作業はどんどん進み、あっという間に一山あった 4 m³分の真砂土が半分になった。体もすぐに温まってきた。冬だからこ

そ「温まって来た」と明るく言えるが、これが違う季節ともなるととても大変な作業だ。

先週の古川さんからの指導もあり、スコップをうまく使えるようになってきた。一輪車の操縦もだんだん安定してくる。ここでの作業の動きは、言葉で説明されて理解するよりも、自分の体に自然に染み付いて覚えていく。そのことを実感した。

途中から、男女別に分かれて作業を行った。女性陣は、土運びを継続して行う。かなりのハイスピードで、今日のこの作業時間内で一山の土はなくなってしまった。



土留め作りは、男性陣と先生が進めた。2人に先生から石垣の仕組みについて伝えられ、あとは自分たちで石を運び、選んで組み立てている。なかなか、ぴったりとくる石がなさそうで、2人で話し合いながら進めていた。

ここで作業をスタートさせてから、5回が過ぎてしまった。振り返ってみてやっと、5回も

作業を重ねたことを実感した。少し寂しく感じるのはなぜだろう。



草を抜き、木を切り、2山の土を運び入れ、今回の作庭実習でも新たな作業の積み重ねができた。

一つのもので作り上げていくために、何年もかかって、何人もの人の手が入って、進められていく。すべての人が、その必要があるのかは分からないが、完全に同じような思いを共有して終着点を描けているわけでもなく、1回ずつの目標と仮の仕上げがあつてどんどんこの空間は動いていく。こんなものづくりの方法もあるのだ。

人の手が加わる、そこに自然の力が作用することでここは変化している。それには、水、風、植物の持つ生命力、そんなものが大きく関わっている。これらがなければここは完成しない。完成することはないのかもしれない。常に変化し続ける空間に、私たちはほんのちょっと触れているだけなのだろう。

ここでの作業に携わっている事は、私にとってものを作る時、人間の力の及ばないところで作用する「何か」に気付ける大切な時間なのだ。



ある雨の日の作庭実習の授業で、「庭を作ることは、今すぐに楽しめる物を作ることではない。庭は、数年後、数十年後たってやっと、庭として成立して楽しめるようになるものだ」という先生の話思い出した。

これは、庭を造ることや共生園での作業に限らず、ものを作ること全般と似ているところが多くあるように感じる。全てが初めに頭の中で描いたイメージ通りに進むことは滅多にない。どこかで何か予想もしなかった出来事に遭遇する。それをうまく受け入れることも大切になるのだ。特に、常に変化する自然を相手にするということは、その流れの中で、流れと共にものを作っていかなければならない。

普段意識しないようなこのようなことを、この空間に身を置くことで実感し、自分の立ち位置を振り返るきっかけになっているように思う。

目の前に広がる共生園の姿は、雑草が生い茂った姿から大きく変化した。とにかく無我夢中で、目の前のことに取り組むこと、まずはやってみるということ、ここでの大切な姿勢だ。その積み重ねが、結果として今の景観として私たちの前に存在している。

数年後、数十年後、この空間がどうなっているのか。

たくさんの作業とその中で流れた時間、作業した1人1人の心の中にあった思い、自然の力、そんなものがうまい具合に溶けあったこの空間を見てみたいと思う。

うっすらと雑草が生えて来ている。私たちが入る前も入ってから、これからも、この流れはずっと続いていくのだ。この空間の変化は止めることはないようだ。



2010 年度の環境共生園に関しては、「門」についての話を欠かすことはできません。その導入の経緯も含め、ここからは岩村が報告します。

2009 年度の作庭実習を終えた、2010 年 2 月はじめの寒い日に、環境共生園で学生たちと一緒に年度末の片付けをしているところへ武蔵野副学長が来られ、「門と小屋を大学で引き受けることにしたいが、ここに入れていいだろうか?」と切り出されました。聞くと、共生園の西側に隣接していた消防学校が上鳥羽に移転した後、旧校舎以外の跡地を更地にするにとともに、そこに残っていた元陸軍の門柱等遺構の移設場所を探しているということです。「考えておいてほしい」。実物を見てみないと判断ができないということで、早速、建物を解体している現場に学生と二人で行きました。手分けしてしばらく探したのですが、それらしい物は見当たりません。ブルドーザーにホースで水をかけていた作業員に尋ねたところ、指示があって既に取り払い、地中へ埋め整地したという返事。どうやら何らかの行き違いがあったようです。それっきり、わたしの頭の中からそのことは消えていきました。

2 月 12 日に副学長室に呼ばれました。武蔵野氏のほかに二人の来客がありました。いただいた名刺によると「戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会」とあります。それで思い起こして、先日現場作業員から聞いた話を伝えたのですが、遺物は業者によって大切に保管されているという…。よくわからないまま話し合いに参加し、戦前の陸軍第十六師団関係の遺構である門柱と歩哨舎等を環境共生園に受け入れることが決定しました。実物を見ていないわたしの内では、イギリスの庭園などに見られる崩れかけた遺跡を導入するような気持ちで、それもいいかと思っていたようです。

翌週 17 日には同じメンバーで環境共生園の現地を見て、設置場所を環境共生園の北端、附属環境教育実践センター南沿いの附属高等学校への道から近いところと合意しています。わたしとしては、学生や生徒の注意を引きやすい場所で、かつ、木々に覆われてあまり目立たないところを選んだつもりです。共生園の造作の中心部分に入れて、これ見よがしなものになることを避けたかったということです。結果として、門は金網のフェンスと生垣に沿わせて建てられることになり、門としての役割から離れ、記念物・オブジェの性格を強くすることになりました。

2 月 22 日、戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会と市の担当者ならびに解体に当たった上村組の現地での話し合いに、同席するよう依頼を受け参加しています。まえもっての話し合いで、遺構の譲渡についてはあらかじめ話が付いていたようなのですが、このときはその運搬の方法と費用に関して両者の間に考え方の違いがあるようでした。わたしが口出しできることでも無いようなので、曖昧な顔をして聞いているしかありません。この日は戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会側がいくらかの経費を負担するということで決着したようでした。しかし、3 月 23 日に遺物が共生園の設置場所へ運ばれてきたときには、運搬に関する経費は上村組が負担することになります。それもそのはず、歩哨舎にはひび割れが走り、形こそ残っているもののあちこちの部分、セメントが剥落しています。となりに、赤錆びた鉄の大きな門扉（これは戦争当時の物ではないように思われます。わたしとしては、できれば門柱のみを設置したいと考えていました。）2 枚が、投げ出されたようにおいてあり、その横の門柱にいたっては完全に崩壊し、形を成していません。柱の心材に使われていたと思われる鉄棒はどういう力が加えられたのか

クニャクニャに曲がっており、表面を覆っていた煉瓦もひとつひとつがバラバラで、しかも多くが砕けており、再び組み立てることもままならない有様です。2本の門柱は1つの瓦礫の山になってそこにあります。まるで地震跡であるかのような光景に思えました。当初会った作業員の思わせぶりの表情が思い浮かびました。

遺跡の設置は、京都山科の小林造園が担当しています。この瓦礫を相手にした手間と時間のかかるやっかいな仕事であったようです。歩哨舎はセメントで補修され、門柱は古い写真を参考にして、残った煉瓦を表側に使い裏側には新しい煉瓦を補って組み上げられています。完了したのは4月12日とのことでした。ちなみに工事費は46万5千円と報告されています。後に建てる説明板も合わせてこの間にかかる費用については、京都府立大学名誉教授井口和起氏を呼びかけ人代表とする「元陸軍第十六師団輜重部隊の遺跡を保存する会」が発足し、その会を中心とした多くの人の協力によって賄われました。その後この遺跡は、元陸軍第十六師団輜重部隊の遺跡を保存する会から京都教育大学へ寄贈する手続きがとられるとともに、5月29日現地見学会が持たれ、多数の参加を得て一般に広められています。

秋も深まってから、2010年度の環境共生園での作庭実習がはじまりました。共生園の植物たちの馬鹿騒ぎのような夏が過ぎ、門周辺もやっと森としての落ち着きを取り戻しつつあります。移設に伴う工事跡も、陽にさらされ雨に打たれて少しずつ馴染み、落葉に覆われていきました。設置直後は、予想以上に大きく武骨な物だと感じられたそれが、言うほど気になる物では無くなってきたのは確かです。

歩哨舎の裏側に1本のかなり長い切石が置かれているのに気付きました。何の石だろうと裏返してみると、なにやら文字が刻まれている。標識のようです。かなり風化しているのか読みづらい文字も、少し離れて見るとかろうじて判ります。「陸軍省所轄地」。最初の話し合いのときに、もうひとつ小さな石柱があると聞いていたことを思い出しました。移動の際には行方不明になっていたのがその後見つかり、ここに運ばれて置かれたものと思われます。こいつもどうやら遺構の一員です。門の左側に立ててやることにしました。

12月9日、石の扱い方を学んだ後に、2名の学生が古川氏の指導の下、さっそく石柱建てに取り組みました。穴を掘る道具を使って深い穴を掘り、そこに石柱の下方3分の1位を埋めて立てるのですが、素人にはなかなか思うようにならない仕事です。スコップやツルハシが穴を掘る道具だとは知っていても、それだけで穴が掘れる訳ではない。それほど固い地面ではないのですが、案の定、地中の石にはね返されて苦しんでいます。それでもあえて見ていることにしました。そのうち体が覚え、作業はどうか進むものです。まず建てようと思うあたりにツルハシとスコップで適切な穴を掘ります。このまま埋める深さまで掘り進むと、穴は広くなってしまい、地面が柔らかくなり、石柱が倒れやすくなってしっかりと立たせることが難しくなります。狭く深い穴を掘る必要があります。ここからはカナテコを垂直に使って、丁寧にゆっくりと掘って行かねばなりません。わたしも古川氏も別の作業をしながら少し離れて待ちます。しばらくの後、ようやく穴は必要な深さに達しました。そこで、穴の底を突き棒を使って突き固めてから、石柱の向きを定めて入れ、垂直になるように支えます。次に、穴と石との隙間に、土を少しずつ突き棒で突きながら埋め戻していきます。ここでの突き固め方が重要で、固めれば固めるほど石柱をしっかりと建てることができます。あとは作業で荒れた周囲の地面を整地

して終わりです。寒い日だったのですが、ふたりとも汗ばみ、肩で息をしています。それでも満足そうな笑顔がありました。これで遺構の移設は本当の完了です。



門は、今ではかなり以前からここにあったような顔をして、周辺の風景を眺めるかのように立っています。この周囲は 10 年前に共生園に着手したときに苗木を植えたあたりで、コナラやクヌギが大きく成長して枝を広げており、森をとおしてみると雑木林の中に取り残された遺跡のような風情で、なかなか趣のある景色にも思えます。しかし、添えられた説明文にもあるように、「京都府出身の兵士たちが入隊した第十六師団は、中国での南京戦やフィリピンでのバターン戦・レイテ戦などに参戦し、現地の人々にも甚大な被害を与える一方で最後は全滅しました」。この 2 本の門柱の間を通り送り出された兵士や軍馬の多くが、再びこれを通ることはなかったのです。その事実を背景にすれば、残された人のそれぞれの思いがこのなんでもない朽ちかけた物に重なっており、関係する人ひとりひとりにとっての意味が最近再建されたとは言え、このオブジェに重なっている。そのことは決して軽いことではありません。今、この景色を前にして、慄然とせざるを得ません。が、当たり前のことですが、そんな思いも薄れていく。意味も変化し消えていかねばならない。森というものの上にある時間を思えば、それは仕方のないことであり、当然のことなのでしょう。そうやって初めてこの門は崩れていくことができるのです。そのとき、この森の将来の枝葉が、朽ち果てた廃墟を静かに覆い包んでいることを願います。

